
正義の味方と戦姫達

lit-ters

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方と戦姫達

【Nコード】

N4209X

【作者名】

l i t t e r s

【あらすじ】

F a t e / s t a y n i g h t の衛宮士郎の異世界？転移物。
私が最近買った小説「織田信奈の野望」とのクロスオーバーです。
F a t e を知っていれば（アニメだけだとネタバレあり）、問題なく読めるようにしたつもりです。私の初作品になりますので、かゝる気持ちでご覧になってください。更新は不定期です

主人公設定（簡易）（前書き）

主人公の衛宮士郎の設定です。といっても、私が動かしやすいようにしたのですが：

主人公設定（簡易）

衛宮士郎（設定）

姿や戦闘時の服装は完璧にアーチャーと同じだが、正義の味方を諦めず、紛争地域を巡り、夢を追いかけている。

口調は戦闘時などはアーチャーになるが、普段は高校時代の彼と同じのしゃべり方である。

料理は執事時代で最高潮まで達し、紛争地域を巡った経験からサバイバルの知識、料理のレパートも豊富である。ただし、この作品で料理のシーンが描写されることはないだろう。理由は、作者が料理できないからさっ！

遠坂の宝石代の援助のため、ガラクタいじりで鍛えた手先の器用さでアクセサリや武器の作成ができる。

第一話（前書き）

はじめまして！私、L i t t e r sと申します。この衛宮士郎異世界物、コンセプトは投影魔術を使わないです。もし、この先投影魔術を使うことがありましたら、ああ、ネタ切れなんだなあと暖かい目で見守ってくださいね！

第一話

「…なあ、遠坂？こんなところに何の用なんだ？」

衛宮士郎は獲物を探すかの様に辺りを見回す遠坂凜の姿を横目に見ながら尋ねた。

彼が疑問に思うのももつともだろう。ここは物を担保に金銭を借りる質屋である。

というのも、遠坂家の家訓は「常に優雅たれ」である。優雅とは程遠い（店主には失礼だが）古臭い質屋に行く者の家訓とは思えない。

「俺は宝石を言うって言うから、てっきり宝石店に行くのかと思ってたのに…」

「はあ…。何もわかってないのね、士郎」

彼女、遠坂は呆れたように腰に手を当て士郎を見る。

「いい？そこらへんの金持ちが他人に見せびらかすために宝石を買うのとは訳が違うの。私は魔術に使うための宝石を捜しに来てるのよ。こういうところの宝石の方が持ち主の思いとかが強く残っていたり、年月が経って概念が付加されたりしてるのもあるから魔術向きのよ。まあ、概念が付加なんてめったにないんだけどね。それに…」

辺りが一瞬静かになった。嵐の前の静けさというやつだ。

「私にはお金がないのよ！！！！！！わかる、金欠なの！！！！！！
！！ただでさえお金がないんだから、こうやって地道に足で掘り出

し物の宝石探して少しでも安く手に入れるしかないでしょうが！！！！！！」

爆発した。エクスクラメーション・マークの大安売りである。

「わ、悪かった。遠坂が言わんとしてることを理解したから、落ち着いてくれ」

士郎は遠坂を落ち着かせようとするが、

「なんなのよ。なんでこんなにお金掛かるのよ！ルヴィアなんてくぁwせdrftgふじこ！！」

一度火のついた彼女は止まらないのである。

「はぁ、遠坂…。とりあえずお店に迷惑掛けるのは止めてくれよ」

士郎は彼女をなだめるのを諦めた。彼は知っているのだ。ああなつた彼女は止まらないことを。止めようとすると、意識を失い、目がさめると病院のベッドの上にいることを。

彼は自分にて被害が及ばないよう早々に戦線離脱し、自分も何か掘り出し物がないか物色する。

「おっ。これ、ずいぶんと古そうな本だな…」

士郎はふと目に付いた書物を何気なく手に取った。

「うわっ、なんだ？」

頭の中に声が響いた。

” この未完成の物語を完結させてください ”

突如、激しい光が本から発せられ、その光が収まるとその場には誰もいなくなっていた。

「士郎？ しろろ？ あ の へ っ ぽ こ ど こ い っ た の か し ら ？ 」

我らが遠坂女史が士郎がいないのに気が付いたのはそれから二時間後だったとか…。

第一話（後書き）

時間が経つと概念が付加するゝのところは私の独自解釈ですので、あまり突っ込まないでください：

第二話（前書き）

第二話になります。ここはこうしてみたら？などアドバイスがあればよろしくお願いします！

第二話

「ん…。なんだったんだ、今の？」

衛宮士郎の目が古い書物から発せられた強烈な光の刺激から回復した時、

「……なんでさ？」

思わず彼の口癖が出た。それも仕方がないだろう。なぜなら、彼がいたのは古臭い年代物独特の匂いがしていた質屋などではなく、

火薬や血の臭いが漂い、人の怒号や断末魔が鼓膜を震わせる戦場だったのだから。

聖杯戦争の頃の彼ならもっと狼狽していただろうが、彼は正義の味方の夢を持ち続け、世界各地の紛争地域を巡り、命を救っていたのだ。もちろん弱き人を助けるために命を奪ったこともあるし、紛争を収めるために戦場を駆け回ったこともある。

そんな経験が彼にここはどこかの戦場であることを理解させ、瞬時に頭を切り替えさせた。

——なぜこんなところにいるのかは後だ。とりあえず今はこの状況をどう脱するか：

と彼は普段着である黒いジャージと黒のジーンズをみ……

「なんでさ？」

彼は口癖をもう一度繰り返す。

というのも、彼が着ていたのは黒いジャージとジーンズなどではなく、戦場に立つときに来ていた赤い外套と黒いプレートアーマーだった。

……まあいい。これはうれしい誤算だ。だが、手ぶらというのが痛い。投影するのは憚られるし、戦場で死兵の武器を回収するしかないか：

とりあえずの方針を定めた時、

「新手の敵だみゃあ！」

戦場でぼーっと突っ立っていたからか、赤い外套などという目立つ格好していたからか（前者3割、後者7割ぐらいだろう）二種類の格好をした兵士達が士郎に長槍を持って突進してきた。

士郎は四方八方から飛んでくる点の攻撃を避けながら

——服装から察するに戦国時代のようなだが：

と結論付けた。

その根拠は至極単純、彼に長槍を向ける兵士達は皆足軽と呼ばれる格好をしていたからだ。

「こいつでかいくせにすばしっこいみゃあ！」

「いい加減に当たるみゃあ！」

足軽達が疲れと当たらないことに自暴自棄になるのとで槍が大振りになって来た。それを見逃さず、向かってくる槍のひとつを掴み、

「――はあっ！」

気合一閃、槍を持つ足軽ごと振り回した。

「みやあああああ」

もちろん振り回されている足軽は堪ったものではないし、今まで寄って集って囲んで突いていたのだ。ほかの足軽達も

「へぶう！」 「げふっ！」 「み、みぎゃ！」 e t c e t c

悲鳴を上げ、気絶した。

……さて、このままここに突っ立っていても状況は変わらないだろうし、とりあえず動くか…

士郎は状況を打破するために移動を始めた。

無駄な戦闘を極力避けながら、戦場を進んでいると多くの人の気

配を感じるようになった。

……多くの気配を感じるが戦っているという雰囲気でもない…。陣が近くにあるのだろうか？

気配を消し、慎重に近づいていくと：

「やはり陣か」

旗を見ると、○の中に二本線。

「あれは確か…、駿河の大大名今川義元の旗印だったか？」

士郎が頭の中をひっくり返していると、甲高い笑い声が聞こえてきた。

「おーっほっほっほ。わらわは喉が渴きましたわよ、元康さん？」

……戦場に女性の声？……いや、戦国時代にも戦場に出る女性がいただろう、たしか：

「は、はゝい。かしこまりました、義元さま。今、お持ちしますので」

……ほら、見ろ。元康という人物も女の子の声ではないか。やはり、戦場に出る女性もいる……元康？モトヤス？もとやす？MOTOKASU？今川軍の元康と言えば松平元康、つまり江戸幕府を開いた徳川いえや：

「なんでさ？」

パニックになり、思わず口癖が出てしまった、士郎君。

「!？何者ですか？」

：仕方がないか

「すまない。麗しい女性の声が聞こえたものでね。つい聞き耳を立ててしまった」

観念して、士郎は彼女等の前に姿を現した。そこで彼が目にしたのは戦場には似つかわしくない十二単を纏った貴族趣味な女の子と幸薄そうな小柄な体に鎧を纏った眼鏡っ子だった。

「確かに、わらわの声はうぐいすの囀りのような美しいですから、聞きたくなってしまうのはしかたがn：あら？奇妙な鎧を着ていますわね。南蛮の鎧かしら？なかなか素敵ですが、もう少し派手でもいいのではなくて？」

「あわわ。そんなこと言ってる場合ではないです、義元さま。服装から見て味方ではないです。織田方の乱波（忍者）ではないかと思われます」

「はっ！わらわとしたことがつつい服装に目がいつてしまうなんて。元康さん、やっておしまいっ！」

「承知いたしました」

元康は日本刀を抜刀したが、容姿が子狸っぽいのでいまいち迫力に欠ける。ただの足軽なら

「こんな子狸っぽいのにやられるかみゃあ！」

と外見から判断し、突っ込んであっさりやられてしまうだろう。腐っても徳川家康、とっても強いのだ！

――さすがに無手で無力化は手間取りそうだな…

どうするか辺りを一瞥しようとしたその時
ぼむっ！

そんな音共に辺りが煙に覆われた。

「な、なんですか？ 敵襲ですか？ 元康さん、わらわを守りなさい！」

「わわわ。義元さま。暴れないでくださーい」

突然の事態に混乱し始める二人。

「こっちだみゃあ！」

そんな声とともに士郎は手を引っ張られた。

「わわわ。逃げられてしまいました」

「言われなくてもわかっていますわ！ 早くなんとかなさいっ！」

「も、もう大丈夫かみゃあ…」

「ふむ、ならもう手を離してもらえないか？ 君はどうか知らないが、私にそんな趣味はなくてね」

「わ、わしだってそんな趣味ないみゃあ！ 助けてもらっておいで

そりゃあないみやあ！」

「ふ、冗談だ。あそこから逃げるのは少し骨が折れそうだったの
でね。助かった」

「…お前さん、性格悪いみやあ」

煙幕を張り、士郎の手を引き陣から脱出させたのは小柄なサル顔
の足軽だった。

「まあ、いいみやあ。お前さん、話聞く限りじゃ織田の乱波らし
いみや？」

「む？」

「わしは今川の殿様に仕えておったが、あの方はブサイクな男が
嫌いであみやあ。あそこには出世できそうになかったぎゃ。そこ
でこの戦のどさくさに、織田方に寝返ろうと考えておった。なあお
前さん、わしを織田の殿様に紹介してくれんか？」

……大体状況が把握できたな。これは、織田と今川の合戦だった
ということか

「どうじゃ？」

「助けてもらったことには再度礼を言わせて貰うが、私は織田の
忍びではないのだよ」

「違ふのきや？」

「私は衛宮士郎だ。特にどこにも属していない」

「わしは木下藤吉郎じゃ。士郎！どこのも属してないのなら、わ
しと一緒に織田方に行ってみんか？織田の殿様は実力があれば身分
だの顔だのは問わんと聞いたみやあ！」

「私も特に行く宛てもないしな…。構わんぞ」

「よっしゃ！今から織田方に出発みやあ！」

……木下藤吉郎？もしかして、大阪城を立てたあの豊臣秀吉か？

藤吉郎は意気揚々と織田の陣があるであろう方角に向かい進みだす。

「わしはなあ、農民のせがれなんじゃ。じゃが、今は乱世じゃ。合戦で手柄を立てれば出世できるにやもしれん」

「なにか、夢でもあるのか？」

「よくぞ聞いてくれたにやあ！わしは一国一城の主になるのじゃ！」

「一国一城の主？」

「おうよ！男としてこの世に生を受け、一国一城を望まぬ生き方などわしにはできんみゃあ！だってお城の主となれば、女の子にモテモテだみゃあ！」

「そうか、女の子にモテm……。……まあ、がんばってくれ」

「もちろんだみゃあ！そうなった暁にはもし万が一気が向くことがあったら、一人ぐらい紹介してやることに起こるかもしれんみゃあ！」

「期待せずに待っているさ」

「士郎にはなんか夢はないんぎゃ？」

「私か？私はそうだな……。正義の味方になりたいんだ」

「正義の味方？なんでまたそんなもん？」

「簡単さ。困っている人を助けたいんだ」

「要は、女の子助けてモテモテになりたいってことだみゃあ！わしと同じ夢を持つ同士仲良くやるみゃあ！」

「なんでさ？い、いや、俺はそんな気はなくて……」

「ん？士郎、しゃべり方変わったみゃあ」

「ああ、こっちが普通なんだけど、気を引き締めてる時は無意識のうちに変わってるんだよな」

「そっちのほうか士郎らしくて、わしは好きだぎゃ」

そんなことを二人で話しながら、進んでいくと、だんだんと馬蹄、鉄砲の音、足軽たちの叫び声が大きくなる。

「藤吉郎、近づいてきたぞ。」

「わかってるみやあ。活躍して殿様に取り立ててもらうみやあ！」
「あまり焦らないようにな、行くぞ！」

「おうよ！」

士郎は道中で出会った死兵の槍を借り、藤吉郎と共に死の蔓延する戦場に突撃していく。敵味方入り混じる戦場で息一つ乱さずに士郎は確実に敵を捌いていく。藤吉郎も小柄さを生かして戦場を駆け回る。

特に士郎の戦いは無骨であるが、それ故の美しさがある。

「…ん？ あんなのがうちにいたか？」

腕の立つ者が彼の姿を目で追ってしまうのもしかたがないだろう。

小一時間ほど草原での押し合いが続いた。

……藤吉郎は大丈夫だろうか。いつの間にか逸れてしまったが。

士郎たちの活躍もあつてか戦局は織田軍有利になっていた。

「皆の者！ 勇気を奮い起こせ、あと一押しだ！」

軍馬に乗った鎧武者が、前線に押し出てきて凜とした叫び声をあげ、一気に敵前線を崩す好機とみた騎馬隊が突撃していく。

「足軽ども！ 誰か本陣へ戻り、ご主君をお守りせよ！」

だが、足軽たちは、敵の首一つでも取ることに夢中で誰も本陣へ引き返さない。

「ふむ、機動力の優れた騎馬隊が突撃したのだ。私は本陣へ向かうでしょう」

士郎は本陣に向かいながら、ちらりと騎馬隊を指揮す馬上の武士を仰ぎ見た。

立派な鎧兜に身を包んでいたが、またしても女の子だった。

……やはり私の知る歴史ではないか。しかし、女性が危険な戦場に出るのはやはり気が引けるな。

槍を構え、本陣に到着した。よほどの乱戦だったのだろう、すでに大将を守る守護兵達も数人を残して前線へ出てしまっており、守りはスカスカだった。

そこに、いずこからともなく急襲してきた今川軍の決死隊が切り込みをかけてきた。守護兵達は急襲に慌てていた間に斬られてしまった。

——ふむ。こちらに来て正解だったようだな。

織田信長と思しき大将に背を向け、

「私の後ろにはねずみ一匹たりとも通すつもりはない」

「あと一人だ、やってしまえ」

襲い掛かってきた一人を捌く。

「こいつ、強いぞ！」

「囲んで倒せ！」

「考え自体は悪くない。数とはそれだけで単純な力だ。だが…」

一瞬だった。決死隊には彼が消えたように見えただろう。だが、消えたのではない。彼は移動しただけ。

そして、移動した先には囲んだ決死隊の内の一人。冷たい刃が体を貫いた。

何が起こったのか？理解しようとするその一瞬あればいい。彼にはそれで十分だった。あっという間に一人、また一人と倒れていく。最後の一人を倒し終え、問う。

「怪我はないかね？織田軍の大将さん？」

side ???

さすがに乱戦だからといって本陣の守護兵まで前線に出したのがまずかったかしら…。急襲をかけられ、残した守護兵達は混乱のうちに倒されてしまうなんて…。

まあ、それでもこんなところで死ぬ気はないけど…

そしたら、いきなり目の前に赤が飛び込んできた。そして、

「私の後ろにはねずみ一匹たりとも通すつもりはない」

突っ込んできた一人を倒したけど、目の前のやつは囲まれてしまった。

「考えとしては悪くない。数とはそれだけで単純な力だ。だが…」

——速い！目で追うのが精一杯。あんな速度で動かれたら何度打ち合えるかわからない。

あつという間に決死隊を全滅させ、私に

「怪我はないかね？織田軍の大将？」

見たこともない鎧に赤い南蛮風の着物、そして白髪で黒っぽい肌。間違いない！こいつ南蛮人だ！

side out

「怪我はないかね？織田軍の大将さん？」

士郎はそう問いながら大将の顔を見た。

……やはりか、こう何度も同じ展開ならば驚きはせん。

茶色がかった髪をでたらめな茶筌に結っており、甲冑など着ていない。

頬とおでこは煤で真っ黒。湯帷子ゆかたびらを片袖脱ぎにし、太刀と脇差をわら縄で巻き、腰の周りには火打ち袋とひょうたんをぶら下げ、腰と足を覆う袴の上には虎の皮を腰巻のように巻いている。左の肩には飼い慣らした鷹、右の肩には南蛮渡来の種子島を担いだ十代後半

ぐらいの女の子が立っていた。

……そう、女の子が。

第二話（後書き）

本文で使われている

—— は視覚から得た情報から判断して考えたこと

…… はそれ以外の聴覚や、雰囲気、あとは単純に思ったこと
という使い分けをしています。

第三話（前書き）

いただいたアドバイスを参考に士郎の頭の回転率をすこし下げってみました。

第三話

士郎が自分との世界との違いに呆れていると、背後から蹄の音が響いてきた。

「ご主君。戦はお味方の大勝利です！ご無事でしたか！」

さつき騎馬隊を率いて前線に突撃していた、勇ましい女の子武将だった。

その子は茶色の髪をポニーテールにした体育会系の凛々しい顔つきをしていた。

「ん、なんだ貴様は？それにその奇妙な鎧……。どこかで見たような……」

彼女は先の戦場で士郎の戦いぶりに目を奪われたはずなのだが……。もう忘れてしまったのだろうか？

「さてな、君のようなきれいな女性と出会っていたのならば忘れることはないと思うがね。初対面だろう」

「き、きれいっも決めたわ！あんた、わたしに仕えなさい！」
「姫さま!?!」

「六、あんたは見てないだろうけどこの南蛮人、相当腕が立つわ。ただでさえ織田の足輕は戦国最弱なんて言われてるんだから、絶対必要よ！」

……ふむ、六とは彼女の名前か……

士郎を他所に、六と呼ばれた女の子と姫様は話を続けていた。

「しかし、姫さま！このような奇妙な輩を仕官させるのは…。：はっ！思い出しました！あたし、戦場でかなり腕の立つ者を見かけました！そのような訳もわからないやつよりもよっぽどよいかと！」

「六！これは決定よ！それに六の言う奴も仕官させればいいじゃない。腕の立つのは何人いても困らないわ！手の空いているのに探させるから特徴を教えなさい」

「は、はいっ！得物はほかの足軽たちと同じ長槍だったのですが、服装が変わっていました」

「こいつ以外にもいたのね、変わった奴…。で、どんな格好よ？」
「確か赤でした！そうちょうどそこにいる男のようn…。」

「…」

「…」

「…」

「…：六、一応聞くけどこいつのことかしら？」

「はい…」

「はあ…。なんかこのやり取りが一番疲れたわ…」

「うああああっ。姫さまに呆れられたあっ!？」

「：そろそろ話を戻しても構わないかね？」

「そうね。疲れちゃったし、ちゃっちゃと終わらせましょ。わたしは織田信奈！尾張の守護大名、織田家の当主よ！六、あなたも名乗りなさい」

「御意。あたしは柴田勝家だ。それと貴様！信奈さまに対してその態度と口調はなんだ！無礼であろう！」

信奈の人望か、勝家の熱い忠義か今にも剣を抜いて斬りかからんかのような勢いで勝家は士郎に迫ってきた。

「これは失礼しました。私の名は衛宮士郎。：それと勝家殿。そのように美しい顔を近づけられると…」

「…えっ？あ、あわわわ」

頭に血が上って真っ赤になっていたためか二人の顔は危ないほど近づいていた。勝家は指摘されたことでその事実に気づき、怒りに染めた顔を羞恥に染めながら後ろに下がった。

「……………」

信奈は両手で体を抱きながら、無言で士郎を見ていた。

「私の顔に何かついておりますでしょうか？織田信奈さま？」

「やめて、そのしゃべり方。なんだか鳥肌が立つわ…。あと、さまもつけなくていいわ」

「そういつてくれると助かる。その方が俺も楽だ」

「あなた、衛宮士郎って言ったわね？ってことは日本人？親が南蛮人だったりしないの？」

「ああ。俺は間違いなく日本人だよ」

「…まあ、そういうんならそうなんですよ。ていうか、そっちのしゃべり方が素？」

「氣を引き締めてる時は無意識で口調が変わるんだよな」

「そっちのほうがあなたに似合ってる氣がするわ」

「そうか？ありがとな」

「別に褒めたわけじゃないわ。わたしがそう思ったからそう言うただけよ」

素直に感謝されて恥ずかしかったか、すこし頬が赤かった。

「あ、そうだ。もう一人仕官したいっていう奴がいるんだ。連れて来ていいか？」

「別に構わないわよ」

「じゃあ、ちょっと待っててくれ」

そういつて、士郎は足軽たちが休んでいるところに向かって走り出した。

足軽たちの間をすり抜け、藤吉郎を探す。

…いないな。これだけ多いとさすがに探すのは大変だな

「木下氏ならいないでござるよ。」

背後から舌足らずな少女の声が聞こえた。

「誰だ？」

士郎は振り向き、声の主を見た。

そこには、鎖帷子と忍者服で全身真っ黒の忍びが立っていた。忍びの少女は子猫のように華奢で小柄だった。口元はマスクで覆われ、目だけが見えた。その目はぞっとするほど紅く、まつげも驚くほど長い。

…12、3歳ぐらいか？

ロリっ娘忍者キタ！とか思っではいけない。

「拙者の名は、蜂須賀五右衛門でござる。これより木下氏にかわ

り、衛宮氏におちゆかえするといたちゆ」

しかも噛み噛み、いや、神噛みだ！これで勝つる！とか思っ
ては
ry

「失礼、噛みました、でござる」

「大丈夫か？舌とか痛くないか？」

「…ネタを振ったのにスルーされるとは…。悲しいでござるよ」

「すまん…。それで、藤吉郎がいないというのはどういう意味なんだ？」

「別れてすぐでござった。流れ弾にやられてしまったでござる。南無阿弥陀仏みやむあみだぶちゆ」

「――っ！！ちょ、ちよつと待て！やられたって、……死んだってことか？」

「それ以外にどのような意味があるとお思いでござるか？」

「だって、あの豊臣秀吉だぞ？こんなところで死ぬわけじゃないじゃないかっ！」

「？何を言っているでござるか？申し訳ござらんが、拙者はその豊臣秀吉殿とやらとめんちきがないでござる」

「あ、ああ…。えっと、なんだ…」

士郎はここでミスを犯した。

多少登場人物に変化があるつと言っても、おそらくこれから起こる事件、戦はおそらく確実に起こるだろう。

だが、この世界の人はこれから起きる出来事を知らない。

豊臣秀吉、今は木下藤吉郎だが…が農民でありながら、最終的には関白になるということを知るものはいないのだ。

つまり、木下藤吉郎がこんなところでは死なないという事実を知るのは士郎だけなのだ。

にもかかわらず、士郎は藤吉郎――知り合ってから期間は長い

が――友と呼べる存在である人物の死を聞いて思わず叫んでしまった。

これでは、木下藤吉郎＝豊臣秀吉と言っている様なものである。だが、蜂須賀五右衛門は違う意味に取ったようだ。

「これは、失敬…。誰かを探しているように見えました故、木下氏のことかと早合点してちまいました」

「あ、いや…。も、もう一人いたんだよ！一緒にこの戦で名を挙げようって言ってた友人がさ。でも、待ち合わせ場所になくて…。負傷して手当てを受けてるだけかもしれないって思って、探してたんだよ。見つからなかったけど…。それに藤吉郎も紹介したかったから、藤吉郎も探してたんだ…」

「そうでござったか…。ですが、木下氏はもう…」

「……」

士郎は爪が食い込むのではないかと思うほど、手を握り締めた。

五右衛門はその様子を黙って見つめていたが、彼の様子は藤吉郎を殺したのは自分だというような表情だった。

事実そのとおりで、士郎は自分が藤吉郎と出会わなければ、死ぬことはなかったのではないかと考えていたのだった。

それから数分ほどずっと手を握りしめたままだった士郎だったが、心の整理ができたのか、戦場だった方角に向けて、三十秒ほど黙想をして、五右衛門のほうに向き直った。

「…わざわざ伝えに来てくれて」

「衛宮氏が気に病むことではござらん。人はいつか死ぬ…。それが速いかおちよいかの違いでござるによ」

「心配してくれてありがとな。俺は大丈夫だ。それで君は藤吉郎の…友達だったのか？」

「相方にござる」

「あ、相方？」

「足輕の木下氏が幹となり、忍びの拙者はその陰に控える寄り木となって力を合わちえ、ともに出世をはたちよう、そういう約束でございました」

「…三十字ぐらいが限界なんだな？」

五右衛門は真面目な話をしているのに何をしてるんだ…

マスクの下で、子供忍者、五右衛門の顔がぼっと赤くなった。

「う、うるさい。拙者、ただいまより郎党『川並衆』を率いて衛宮氏にお仕えいたす」

「でも、俺はついさっき織田家に仕官されたばかりだから大した給金は出せないぞ？」

「衛宮氏ほどの実力であれば、確実に出世は間違いないでござるよ」

「それは大げさだぞ」

「ご謙遜を。それにこれは木下氏の最後の頼みでもあるのでござるよ」

「…藤吉郎の？」

「同じ夢を持つ衛宮氏の手助けをしてほしいと」

「最後まで勘違いしてたのか…」

ふふふ、と五右衛門が忍者マスクの下で忍び笑いを漏らした。

「衛宮氏、髪の毛を一本いただく」

ぷっつ。

五右衛門は士郎の頭から髪を一本引き抜くと胸元から取り出してきた藁人形の中にその髪を詰め込み始めた。

「なんか、怪しい光景だけ…。なにしてんだ？」

「我が宿主になっていただく契約でござる」

「なんか嫌な契約だなあ…」

「ふふふ…。さて、そろそろ戻ったほうがいいのではないでござるか？」

五右衛門は意味深に笑うと九字を切り、小柄な体の周囲に木の葉を舞いあがらせると同時にいずこかへ消えていた。

「…：実はよく噛むこと気にしてたのか？」

士郎は反省しつつ、信奈の元に戻った。

「戻ってきたわね。…仕官したいっていうのは？」

「ああ、五右衛門！出てきてくれ」

先ほどと同じように木の葉が舞いあがり、五右衛門が現れた。

「拙者、蜂須賀五右衛門と申す。拙者の率いる郎党『川並衆』を織田家に仕官したいしょちよんでござる。」

「…噛んで最後のほうはあれだったけど、大体伝わったわ。構わないわよ」

「信奈さま?!」

「大丈夫よ。人を見る目には自信があるし、衛宮が連れてきたんなら腕にも問題はないでしょ。ただし！役に立たなかったら切り捨てるから覚悟しなさい」

「御意」

「さあ！新しい奴も入ってきたし、今すぐ出立よ、六」

「御意。この柴田勝家、引き続き姫様をお守りいたします」

「あ、五右衛門。俺のことは士郎でいいからな」

「―っ！ふふふ。承知した、士郎殿」

士郎の言葉に驚いた後、静かに笑い、五右衛門は姿を消した。

「そういえば、なんで出立なんだ？さっき戦は終わったろ？」

「あれは予定外よ。今川軍が邪魔してきたんだから。あゝ、もう！無駄に小姓も失っちゃったし、いい迷惑だわ！」

信奈は馬に跨り、兵を引き連れ、目的地に向かいながら義元の悪口を永遠としゃべり続けるのだった。

「やっと到着ね。本当ならもう終わってるはずだったのに…ブツ
ブツ」

目的地に到着したらしい。目的地は山奥の池だった。

「ここになんの用があるんだ？」

「そっか、あんたこの辺りの人間じゃないのね。この『おじゃが池』にはね、龍神が住み着いてるって噂があるのよ。それで、これまで村人たちが池に人柱として乙女を静めたりしてたわけ」

「なっ！」

「信じられないって顔ね。わたしもだわ。神だの仏だのなんていうわけないのにね。そんなもの、人間の頭の中に住み着いているだけの気の迷い、要は幻じゃん。まったく世の中バカばっかでイヤになっちゃう。ほら、見て」

信奈はなにやら足軽たちを二つのグループに分けている六のほう

を指差した。

「六の隣に線の細い美少女が立ってるでしょ？あれが今年の生贄、人柱ってわけ」

「…それでこの馬鹿げた風習を終わらせるために何をしたらいいんだ？」

「あら？ずいぶんやる気じゃない。もしかして、生贄の子に惚れちゃった？」

「違う。こんな意味のない風習で人の命を奪うのなんて許せないだけだ」

「…そうね。だからわたしが、この村の愚民どもに教えてやるのよ。池の底に龍神なんていないってね。でも、そんなバカなことを信じるやつらに口での説得は無理。だから池の水を全部汲み出して、目に見える形で納得させようってわけ。今川の連中が邪魔したせいで男手はかなり、減っちゃったけどね」

「ないものを羨んでもしょうがないさ」

「…言われなくてもわかってるわよ」

信奈は拗ねた様に言うと、六が分けた二つのグループをそれぞれいけの水を汲み出すグループと周辺を警備するグループに分担させた。そして汲み出すグループの効率が落ちてくると、二つのグループを交代させ、池の水を全部汲み出させた。……土郎はずっと汲み出し続けていたが。

「ほらほら、みんな見てみなさい」

信奈は村人達に池の底を覗かせた。露出させた池の底には龍神などはおらず、一匹の大きな鯉が跳ねているだけだった。

「この鯉が、あんたたちが拝んでいた龍神の正体よ！人柱なんて

くだらない儀式は今後永久に禁止するわ！逆らう者は死刑よ！」
村人たちは

「おどろいたみゃあ」「信奈さまの言うとおりだったみゃあ」

と呟きながら、それぞれの家に帰っていった。

「ふう…。さすがに疲れた」

士郎も休憩せずに汲み出し続けたせいだろう、かなりの疲労の色が見える顔で地面に座り込んでいた。

……しかし、豊臣秀吉として有名になる木下藤吉郎が足輕のまま夢半ばにして倒れたか。どうなるんだ、これから…

自分の知る歴史から外れてしまったこと若干の不安を覚えていると、ご機嫌な様子の子の信奈が近づいて来た。

「衛宮、あんたよくやったわ！あの子、このわたしにとっても感謝してるんですって。良いことした後ってけっこう気分いいわね、ふふふっ」

「そうだな。よかったよ、助けられて…」

士郎は泣きながら抱き合う人柱だった娘と青年（恋人だろうか？）を見ながら、幸せそうな笑みを浮かべながら信奈の話を聞くのだった。

第三話（後書き）

二次創作書くのって大変ですね……。これを手から作っている作家さんに脱帽です

第四話（前書き）

すっかり小説の存在を忘れていたのは秘密です

第四話

おじゃが池の龍神騒動も無事に終わり、信奈は疲労困憊の足輕たちにしばしの休息を与えた。

士郎は疲れた体を休めながら、自分の置かれた状況を整理し始めた。

……ここはおそらく戦国時代。今川義元が健在ということから、桶狭間の合戦よりは以前というところかな？ しかも、俺の世界の歴史とはずいぶん異なってるからあまり知識はあてになりそうにないな。魔術については存在がまだ確認が取れてないから、目に見える投影は避けたほうがいいかな……。肉体強化の魔術はさっき池の水を汲み出すときに使ったから魔術行使については問題ないと思うんだけど、この空き時間に投影も問題ないか試したほうがいいか、いざって時に使えなかったら笑えないから……。あとは、なんでこの世界に飛ばされたかってことなんだけど、……十中八九あの本だよなあ。「未完成の物語を完結」ってことは、完結させられなかった作者の思いが強く残ったってことなのかな？……まあ、遠坂がいないから詳しいことはわからないか。とりあえず、俺は俺のできることをやって、この物語を完結させてみるか。そうすれば、戻れるかもしれない。まあ、だめだったらそのとき考えればいいさ。

とりあえずの方針を定め、士郎は人気がないところに移動した。
…池の水を汲み出すために秘匿しなければいけない魔術を行使したことについてはなんとも思っていないようだ。

——同調開始——
トレースオン

身体機能…正常

魔術回路…27本正常稼働

強化：使用可能

投影：使用可能

固有結界：魔力不足により使用不可

：特に問題はなさそうだな。

士郎はもう一度あたりを確認し、彼の愛用の双剣を投影する。

：劣化もないし、怖いぐらいいつもどおりだ。けど、この世界に魔術師がいるかどうかの確認も取れてないし、投影控えたほうがいいか。

特に問題も見られなかったので、先ほどの方針のままで行くことに決め、皆がいるところに戻った。

士郎が戻ってくると、ちょうど休憩も終わりのようだった。

「そろそろ約束の刻限が近いわね。そろそろ移動しないと間に合わないわ」

「まだどこかに行くのか？」

「走りながら、六にでも聞きなさい」

そう言うと、信奈は北へ向かって馬を走らせ始めた。信奈はいつでも一騎駆けする主義らしかった。彼女らしいと言えばそうだが、

「お待ちください姫さま！」

お付きの者には迷惑な話だろう。慌てて信奈の後を追いかけて始めた。

「ずいぶんと信奈はハードスケジュールなんだな…」

「破亜戸…？なんだそれは？」

「悪い。南蛮語だよ」

「衛宮、お前南蛮語が話せるのか？」

「まあ、すこしだけだな。それで、これから俺達の姫さまはどこに向かわれるんだ？あと、俺のことは士郎でいいぞ」

「お、男の下の名で呼ぶなどっ…。ごほんっ。し、し、士郎…」

「そんなに緊張しなくていいぞ、柴田」

「き、緊張などっ！ん、んっ。お前だけ下の名前を呼ばせるのもな、あたしも勝家でいいぞ」

「そうか、わかった。それで、これからどこに向かうんだ？」

「われらは美濃の虻に会いに尾張と美濃の国境へ向かっているのだ」

「美濃の虻ってことは斉藤道三か？」

「それぐらいは知っていたか。信奈さまは道三の娘を貰い受け、縁戚関係を結ばれる予定なんだ」

「なんでまたそんなことするんだ？」

「この戦国の世では、口約束の同盟ほど当てにならないものはないからな。同盟を結ぶには、大名がおのこであれば妻を迎える。姫大名であれば妹を迎える。そうして縁戚関係を結んで、はじめて同盟が成立するんだ」

「文書とかじゃだめなのか？」

「自分の血筋の者がいれば簡単には裏切れないだろ？要するに人質さ」

「…いい気持ちはしないな」

「確かにそうだが、武士の社会では常識だぞ」

「納得できないけど、理解はしたよ。ところで、姫大名って多い

のか？」

「ああ。最初の第一子が姫であれば、その姫が家督を継ぐ定めだ」

道中、自分の知っている事実と異なる点がないか、勝家に信奈を取り巻く周囲の情勢について簡単に教わった。

信奈は先年、父親を亡くしたため、姫でありながら家督を継いだばかりだということ。

尾張は港を持ち貿易で潤っている経済大国だが、兵が弱く、周囲を敵に囲まれていること。

とりわけ東の強敵、「海道一の弓取り」の異名を持つ駿河の大大名、今川義元は、いずれ京にのぼり、衰退した足利將軍家を補佐して自ら天下を治めると豪語していること。

尾張の東隣に位置する小国、三河に割拠していた松平家も、一時は織田に従っていたが、今では義元の配下になっていること。

にも関わらず、尾張の織田家内部には未だ「大うつけ」と悪評高い信奈に恭順しないものが多く、今川と戦える状態ではないこと。

もし今川軍が全軍で上洛の兵を起せば、尾張などアリのように踏み潰されてしまうことは明らかであること。

そこで信奈は、北で国境を隣する大国、美濃の大名「蝮」こと斉藤道三と同盟する気になったらしい。

「あの蝮、今は斉藤道三なんて名乗ってるけど、元は京からやってきた油売りの商人だったらしい」

勝家は唇を尖らせる。道三を信用していないようだ。

「今は戦国時代で、下克上だろ？普通じゃないのか？」

「元の国主を追放して美濃を乗っ取ったんだよ。しかも、商人あがりなのにやたらに戦に強い。だから蝮と呼ばれて恐れられている。父君の信秀さまは道三と敵対して何度も戦っていたしな。そんな男

と会見しようだなんて、あたしは、信奈さまが心配だ」

勝家がまたため息をついた。

「信奈のことが大好きなんだな」

心から信奈を思う勝家を見て、士郎は微笑を浮かべた。

「あ、当たり前のことを言うな！バカ！」

勝家は士郎の言葉に照れながらも答えた。

「道三と同盟せずに義元に対抗する策はないのか？」

「簡単に言うなよ！せめて尾張の内側が信奈さまの下にひとつになれば、対抗できるかもしれないんだけどさ……これが、ぜんぜんまとまってないんだよなあ。はあ」

「信奈のことを心配するのもいいけど、悩みすぎるなよ。勝家はかわいい女の子なんだから、しかめっ面だともったいないぞ」

「か、かわっ！お、お、お前！そういつてさっきもからかっただら！も、ももも、もうその手には乗らないぞ！」

「なんでさ？勝家はかわいいだろ？それに……う、うるさい！うわあっ！」

勝家は顔を赤くしながら、士郎に向けて槍を振り回した。

「バ、バカッ！危ないじゃないか！」

「お、お前がヘンなこと言うからだ！」

「わ、悪かったって……。でも、さっきの言葉はうそじゃないからな」

「……！と、とにかく少ししゃべり過ぎたが、今の話を言いふ

らすなよ！」

「当たり前だろ？でも、信奈の置かれている状況はあまりよくないな…。勝家、お前が信奈の反対勢力を黙らせたりはできないのか？偉いんだろ？」

「あ、あたしもそれができればいいんだけど…。あたしは、ほんとは弟君の信勝さま付きの家臣なんだ。信奈さま付きのご家老が過労で急に亡くなってしまったので、今日は代わりに侍っているだけなんだ……」

今のはシャレなのかとも思ったが、真剣な話なのであえて指摘しなかった。

「そろそろ正徳寺に着くぞ。あたしは周囲の警備をしなければいけないから、信奈さまの元へ行ってくれ。お前の腕を信用して頼んでいるんだからな。頼むぞ」

「ああ。何があっても守ってみせるさ」

士郎が正徳寺に向かおうとした時、背を向けた勝家が、

「そ、そのまま聞け！……あ、あああたしの話を聞いてくれてありがとっ！す、すこし気から、楽になった！」

そう言って走りだした。

正徳寺。

ここは美濃と尾張の国境にある門前町（寺院勢力が治める町）で、

両国の軍勢が立ち入れない非武装中立地帯だった。

信奈と「蝮」齊藤道三の対面場所としては、最適だった。

この対面の結果いかんで、信奈が道三の娘を義理の妹として迎えることができるかどうかが決まる。

……もしも信奈が相変わらずのうつけっぶりを見せれば、道三は失望して娘を渡すことを渋るところか、この場で暗殺をするかもしれない。俺の歴史では同盟に成功していたけど、どうなるかはわからないから用心しないとな…

「そんなことはさせないけどな」

士郎は決意を声に出し、正徳寺の前にいるであろう信奈の元へ向かった。

信奈を見つけた士郎だったが、信奈の姿は相変わらずのうつけ姿だった。

馬上で憂鬱そうなしかめっ面。ふらふらと揺られながら、髪は茶筍^{せん}まげ。縁日の夜店でも回ろうかという感じの湯帷子^{ゆかたびら}を着込み、暑いのか片袖は外していた。肩には種子島を担ぎ、腰には縄をまいて長短をたくさんぶらさげ、腰には珍品、虎の毛皮。そして、袖を外した側の白い胸元にはどうみても「見せブラ」にしか見えない布きれが…。

「信奈！女の子がそんな格好するんじゃない！」

「ようやく来たわね。ひょうたん持ってなさい。なくしたら承知しないわよ」

士郎の注意に耳もくれず、腰にぶら下げたひょうたんを士郎に預ける信奈。

「こらっ！人の話を聞け！」

「あゝあゝ。聞こえない」

耳を塞いで、聞こえない振りをしていると

「……姫さま、道三どのはずでに本堂へと到着されているとの由」

小姓らしき小柄な少女が、信奈に拝礼をしながら報告した。

「デアルカ。わたしも着替えなくちゃね」

「聞こえてるじゃないか……」

「うるさいわね。まあいいわ、本堂に上がってきちゃダメよ。犬千代と一緒に庭に侍ってなさい」

犬千代と呼ばれた小姓の少女が、こくり、と無言で頷いた。信奈よりやや幼い。ちよっとお人形さんっぽい整った顔の少女だった。

「ふたりとも。蝮が妙なことをしようとしたら、即座に斬るのよ！」

「……御意」

「道三の娘が悲しむだろうから、できればそんなことしたくないけどな」

「腕が立つ癖に、甘いのね」

「いくら強くなってもこの甘さを捨てるつもりはないよ」

「その甘さで足をすくわれないように気をつけなさい」

「ありがとう。心配してくれるんだな」

「……それも持っておきなさい！」

すぱーん。

照れ隠しに信奈は脱いだわらじを士郎の顔面めがけて投げてきたが、士郎はそれをなんなくキャッチした。

「ちっ…」

悔しそうに信奈は本堂に入っっていった。

……そういえば、これって有名な話だよな。秀吉が信長のわらじを温めておきましたってやつ。これは俺もしたほうがいいのか？でも、女の子のわらじだしな…。ヘンな勘違いされそうだし…。うん、やめところ。

年頃の女の子が好きでもない男のぬくもりで暖められた履物を履くことに抵抗がないはずがない。

変態のレッテルを貼られるフラグを回避する士郎君なのだった。

……ちっ

第四話（後書き）

お気に入り登録が増えてるのを見てニヤニヤしていました

第五話（前書き）

お気に入りが百件を越えました！ありがとうございます！

第五話

正徳寺の本堂。

両軍の兵士たちは、衝突を避けるためにこの本堂からはずっと遠ざかっている。

本堂から丸見えになっている広い庭には、士郎と犬千代。

さらに、おそらくはふたりと同じ任務を道三から言い渡されているのであろう、美濃の小姓らしき女の子が一人。

きりりと利発そうな美少女だったが、妙におでこが広い。

またしても美少女か！俺にも潤いを！！俺と変われ、三百円あげるから！！！と思つて……、いいんじゃないかなあ。

その侍とは軽く目で挨拶を交わしただけで、会話はしなかった。

「さて、気を引き締めないとな…」

「……私語禁止」

士郎は気合を入れようとしたが、犬千代にたしなめられてしまった。

すでに本堂では、美濃の蝮、斉藤道三が自分の席に腰を下ろしていた。

歴戦の戦国大名らしく、堂々の貫禄。老いてはいるがその体にはたるんだところがなく、がっちりとしていて、

「わし脱いだらすごいんです、ふんぬっ！いや、ふんすっ！」

と叫び出しそうなパワフル親父だった。

しかし、頭の禿げ具合といい、ケンカは強そうだがそこはかたなく好色そうな面構えをしていた。

重大な会見だというのに軽い着流しの服装で扇子をぱちぱちと開

いたり閉じたりしている様子が面倒くさそうな感じだった。

実は斉藤道三、信奈がここにやってくるのこっそり見ており、なんでワシだけちゃんとした格好しなきゃいけないの？ばかなの？死ぬの？とこの格好で会見に臨んだのだが、士郎はそんなことに気づかず、

……信奈もアレだったけど、この人もずいぶんアレだなあ

なんてことを考えていた。

小一時間が過ぎた。

「信奈とやら、遅いのう」

道三が退屈そうに大あくびをした、その時だった。

「美濃の虻！待たせたわね！」

突然、信奈が本堂に姿を現した。

道三は固まっており、士郎もあまりの驚きに目を見開いていた。

あの意味不明というかパンクというか、今までの奇妙なうつけ姿ではなく、つやつやとした輝く茶髪がかった長髪をはらりと下ろし、最高級の京友禅の着物を艶やかに着こなしたその姿は、まさしく織田大名、織田家の姫君だった。

さっきまでの煤で汚れていた顔には、相変わらず化粧は施していなかったが、陶磁器のように白くてすべすべの素肌があらわになっていた。

むしろ、これほどの綺麗な肌の持ち主であれば化粧なんて不必要

だった。

そしてその信奈の素顔は長い睫も、まっすぐ整った鼻も、小振りな唇も、完璧なバランスが取れていた。

ただ綺麗というだけでは足りず、可憐にして誰よりも高貴、まさに姫君にして大名。自信に満ちた大きな瞳からは、人々を畏怖させずにはいられない力図よい輝きが放たれていた。

——きれいだな…

もともと口下手な士郎はそのような言葉しか出てこなかったが、それで十分なほどの魅力だった。

そして、本堂の上では斉藤道三も、

「う……うおおおおおっ？ な、な、な、……なんという……美少女っ!？」

と思ったことをそのまんま声に出して叫んでいた。……ていうか、なんだ？ その中学生みたいなりアクション……

道三が

「うお、お、おおおっ」

とうなっている間に、信奈はすす……と優雅な足取りで本堂の中を進み、道三の正面へと腰を下ろした。

「わたしが織田上総介信奈よ。幼名は『吉』^{きち}だけど、あんたに吉と呼ばれたくはないわね。美濃の蝮!」

「あ。う、うむ。ワシが斉藤道三じゃ……」

道三は年甲斐もなく照れてしまい、まともに信奈と目を合わせら

れない。

扇子を振りかざして

「恥ずかしいっ」

と呟きながら、茶器を掌の上で回し始めた。

「デアルカ」

女の子らしいカン高い声で、信奈が言った。

「お、お、おう……」

道三は法悦境に迷い込んだかのようなぼわっとした表情で、なんとか返事をする。

……同盟を進める上で有利になるようにわざとうつけ姿をしている訳か……。あれだけ、綺麗だと効果的面だよな。俺には真似できない交渉術だけど……

士郎が感心していると、外套を犬千代に引かれた。

（……違う。わざとじゃない。さっきのが普段着）

（なんだ偶々か。でも、偶々でも効果があったんだから、信奈の勝負運はすごいな）

そんなふたりの囁きを他所に

「蝮！今の私には、あんたの力が必要な。わたしに妹をくれる

わね？」

だが、「美濃の蝮」と恐れられる戦国大名、斉藤道三。

茶を一服しているうちに、先制攻撃を受けて喰らったダメージから立ち直り、きりりっ、と眉をつり上げて迫力満点の真顔に戻った。

「さて、それはどうかのう。織田信奈どの」

にやりと微笑む道三は、迫力満点の悪人面だった。

……やっぱりそう簡単にはいかないよなあ。そうじゃなきゃ、この時代生き残れない。

士郎は事の成り行きを冷静に見つめる。

「いや、『尾張のうつけ姫』。そなたがはたしてワシ同盟を結ぶにふさわしい姫大名かどうか、確かめねばな」

「ふん。何を確かめるというの？」

「そなたの力量、いくつかの疑問があるのでな。尾張一国もまとめられぬうつけという評判をきいておるのではのう」

言葉の字面は「蝮」にしてはおとなしめだが、その鋭い眼光、ドスのきいた低い声、そして今にも信奈に襲いかかって丸？みにしてしまいそうなすさまじい闘気。

「場合によっては、この場でそなたのお命を頂戴するやもしれぬ。くっ、くっ、くっ」

……ん？

「あんたほどの器なら、私の実力のほどは一目見ればわかるはずよ」

「ワシはな、武将を見た目だけでは判断せぬのよ。ワシ自信、今でこそ禿げ爺だが、若い頃は水もしたたる美青年じゃったのでう……。己の容貌を利用して主筋に取り入った。だが、心の中はその頃から毒蝮よ」

「あらそうなの。今の狒狒ひひジジイじみた見た目からは想像もつかないわね」

「ふ、ふ、ふ。歳を取るとな、内面が外見にまで漏れてくるのじやよ」

「さてと、うつけ姫にいくつか尋ねてもよいかのう？」

「いいけど、何かしら？」

真剣なまなざしの信奈と道三が、至近距離から激しくにらみ合う。今にもお互いの喉元を食い破ろうと激突しかねない、そんな迫力だった。

普通の少女ならたちまち震え上がってしまいそうな老獪な「蝮」道三の鋭い眼光に、びくともせず胸を張っている信奈。

むしろ、俄然と道三を見下ろしているようにすら見える。

——たいした胆力だ

士郎も驚くほどのものだった。

いよいよ二人の舌戦が始まった。

道三の眼鏡にかなわねば、同盟の話にはいれない。いや、殺されるかもしれないのだ。

「ひとつめの質問じゃ。そなたはなぜ、領民からも家臣からも、『尾張のうつけ』とそしられておるのかな？」

「逆だわ！私の周りにいる家臣どものほうがうつけなのよ」

信奈は動じず、不適に微笑みながら道三をにらむ。

「はて。そなた、うつけ姿で町をあるいておるといふが」

「違うわ。外出するのに効率がいい服装を選んで来ているだけよ」

「ほう……？」

「いくら姫武将だからって貴族ぶった格好で馬に乗ったり戦に出たりしていたら、機動力が落ちるでしょう？今川義元みたいな十二^{じゅうに}単^{ひんえ}なんて論外。戦で不覚を取ることになるわ！」

「されば、まるで下人のような茶筌まげも効率のためなのかな？」

「ええ、そうよ。綺麗に結っていたら時間がかかってもったいないでしょう？わたしはとにかく忙しいんだから！」

士郎が持っているひょうたんを指差しながら、信奈は流れるように語り続けた。

「腰のひょうたんだって機能的で便利なのよ。いちいち小姓に持たせてこさせなくても、必要なものをすぐに引っ張り出せるわ。種子島だって今は南蛮の珍しいオモチャだと思われているけど、これらの戦では槍や刀にかわって主役になるに決まっているじゃない！今は日本一弱い尾張の兵士たちだって、種子島を持たせれば最強よ！」

「なるほど。じゃが、鉄砲も一挺^{いっ挺}二挺^{に挺}では役に立つまいて」

「そうね。弓と同じで、数が必要だわ」

「工学で希少品の種子島を、はたして何挺集めたのかな？十挺か、それとも二十挺かな？」

「五百挺よ！」

…五百挺！？我が軍の何倍じゃ！？

道三はうめいた。

士郎はその様子を見ながら、隣にいる犬千代に話しかけた。

(信奈はすごいな、あの蝮相手に真っ向勝負してる)

(……当然)

犬千代は、自分の主がほめられたことがうれしかったのか頬が少し緩んでいた。

二人の舌戦も終わりに近づいたようだ。

「参った……参ったわい。お主はまだ幼いというのに、誰にも話したことのなかったこのジジイの策略をすべてお見通しだったのじゃな? いや、参った!」

「蝮、あんたに足りなかったのは、生まれ。商人ではなく、武士の生まれだったなら、美濃一国を奪うのに全生涯をかけることはなかったわ」

「おお、その通りよ」

「狒狒ジジイのあんたたちは比べものにならない高貴な美人。その上、十六歳にして美濃の隣国、尾張を治めている。わたしには、時間があるわ」

「おう。そうじゃのう」

「だから蝮、私は美濃をいずれ併吞^{へいどん}する。あんたの生涯の夢、天下統一の野望を、わたしがかなえてあげるわ。それだけじゃないわ。わたしは『世界』を見ているの。南蛮にだって対抗できる国に生まれ変わらせてやるわ」

「……そなたが尾張でうつけ者と呼ばれる理由が、やっとわかったわい。『天下』どころか『世界』か。途方もないものを見据えておったのじゃな」

「蝮、今のはここだけの話よ。あんたとわたしにしか分かり得ない話だもの。余人に聞かせればうつけどころか気が触れていると言われるわよ？」

いえ。ここに理解できる者が一人おりまする！と庭先から少女の声が響いてきた。

おでこが広い、道三の従者だった。

「おう十兵衛、そちも思わずあつくなつたのじゃな。しかしまだ早い。今は、黙っておれ」

「……ぎよ、御意」

道三が扇子をさして、従者を沈黙させる。

「さて、天下盗りのために美濃が欲しいという話じゃったな、信奈どの」

「そうよ。美濃が、わたしにもらわれたがっているのよ」

「ふ、ふ、ふ。老いたとはいえど、ワシも蝮と呼ばれた男。ただでは出来ぬ相談よ」

「そういうと思っていたわ。わたしも、タダでくれとは言わないわ」

「ふふふ。政略問答の次は、軍略の勝負を試みたくなってきたのう」

「……望むところよ」

いい雰囲気になってきたというのに再び火花を散らし始めた。

……こんなくだらない勝負のために戦なんかはじめられてたまるか！

よろしいならば戦争だ！

と今にも戦をおっぱじめそうな二人を止めるため、気を引き締めた。

「ふたりともそろそろ素直になってはいかがかな？」

「…うるさいわよ。黙ってなさい」

「そんな意地の張り合いで戦に狩り出される私たちの身にもなつてほしいのだがね」

「ほう…。お主、それだけの實力を持ちながら、戦が嫌いかな？」

「当然だろう、蝮どの。嬉々として戦に出て人を殺すなど正気の沙汰ではない」

「相当の数の命を奪ってきたようじゃのう」

「ああ。少なくともここにいる全員が奪った命の数を合わせても足りんだろうな」

「「「「——っ！！」」」」

この場の全員が硬直した。

この男、様々な戦に出て多くの命を奪ってきた自分達全員よりも多くの修羅場を乗り越えてきたというのだ。

「私の話はいい。さっきも言ったが、二人とも素直になるべきではないか？ 傍から見ていると、じゃれる親子にしか見えんぞ」

「き、貴様！ さっきから聞いていれば、道三さまに向かって無礼ではないか！」

「よい、十兵衛。それで、何が言いたいんじゃ？」

「蝮どのが、自分で言っていたのではないか。『歳を取ると、内面が外見まで漏れてくるのじゃよ』とな。会見前は信奈を見定めてやろうという顔だったが、今ではどうだ。自分の夢を継いでくれた子を見るかのようにだぞ。素直になれない理由は、推測ではあるがそうだな…。主君を裏切り、美濃を奪った蝮とあろうものがそのようなお人よしを見せれば、沽券に関わる。蝮も老いたと笑われるのが

怖かったぐらいだろうか」

士郎は今の道三の顔に見覚えがあった。似た人物を見たことがあるというわけではない。借り物の理想を抱いたあの夜の自分の父、衛宮切継とそっくりだったのだ。

「――っ！ふ、ふ、ふ。一本取られたのう、信奈どの。織田家に侍なしとは、ただかれたのう。これほどの者を抱えておるとは……。老いぼれたワシが勝てる相手ではないわい」

「えっ？蝮？」

「ワシが素直になれていないと気づいたのはいつじゃ？」

「確信を持ったのは途中からだ、疑問に感じたのは最初さ」

「最初？」

「暗殺するかもと宣言したことに私は疑問を抱いた。そんなことを言えば、護衛の私達が警戒してやりにくくなるからな。暗殺するのなら、よっぽどの実力者か、愚か者しかそんな宣言はしない。そしてあなたほどの知恵の持ち主だ。少しでも可能性が低くなるようなことはしないだろう」

「：貴様、名はなんと言う？」

「士郎、衛宮士郎だ」

「容貌から南蛮人かと思うたが、日本人か。士郎、貴様のおかげで、最後の最後に素直になることができたわ！ワシの夢を信奈どのに、いや、我が義娘に受け継いでもらうことにするわい」

「え？え？どういうことよ？」

信奈は状況についていけないようだった。普段の彼女からは想像もできない光景だろう。

「信奈ちゃんのためじゃ。この場で、『譲り状』をしたためよう。ワシはそなたに、我が娘に美濃一国を譲って隠居するぞい」

「蝮!？」

齊藤道三から発せられる声は、美濃の蝮のものではなく、我が子に向ける優しい愛情の籠った声だった。

「蝮と憎まれた我が国盗りにも、かような意味があつたのじゃと思わせてくれ」

道三は「美濃送り状」を書きながら言った。

「ほんとうに、いいの？」

開戦もやむなしと考えていた信奈は、道三から向けられる好意に嬉しさを感じながらも困惑していた。

「いずれ我が一人娘をそなたの妹として尾張に送るぞい。ワシは国元の家臣団と話をつけ、信奈ちゃん的美濃入りを準備することにするわい」

信奈は道三からの好意から来る嬉しさを悟られまいと、そつぽを向きながら礼も言わずに送り状を受け取った。

「ところで、さっそく我が義娘にお願いがあるんじゃないが…」

「な、なによ? 改まって…」

「お尻をちょっとだけ触らせてくれんかのう」

「……………」

実はエロに負けて国を譲っただけなんじゃないかと思った土郎であつた。

第五話（後書き）

実は私が一番の読者だったりします（爆）

このシーンは個人的に好きなのところの一つなので、どうするか結構悩みました。

それなりに掻い摘んで書いたのですが、なかなか分かりにくいところも多いと思います。

信奈と道三の駆け引きをそのまま使うのはさすがに不味いですし…

その辺りはぜひ原作をということでもW

誤字脱字などありましたら、ご報告お願いします

登場人物紹介（五話時点）（前書き）

登場人物紹介です。

サブタイトルそのままですね、はい。

登場人物紹介（五話時点）

衛宮士郎
えみやしろう

この物語の主人公。質屋にあった本に触れたとたん、その本に取り込まれた。

頭に響いた声をヒントにこの物語を完結させれば元の世界に帰れるかもしれないと、物語に介入していく。

解析、強化、投影の魔術を使うことができるが、魔術の存在を確認していないため、目に見える投影を行わないと決める。

料理はロンドン時代の金ぴかお嬢様の執事をしていた経験から、超一流である。だが、作者は料理ができないので、料理の描写はほとんどないに等しい。

ものづくりも得意で、アクセサリや武器の作成も可能である。

戦闘スタイル、強さ、格好はアーチャーと同様である。

アーチャーとの違いは彼が切り捨てた甘えをまだ持ち続けているところ。

戦場で出会った信奈に腕の立つ南蛮人と間違われてそのまま仕官させられた。

パワーバランスについて

アーチャー並の戦闘能力はやりすぎでは？とのアドバイスをいただいたので、戦ったら士郎はどれくらい強いのか？を表記させていただきます。

足軽たちは束になったところで勝ち目なし。切れ者の軍師がいれば多少善戦できますが、士郎が勝ちます。というのも、やっぱり英雄に近いところまで行っているのだから、負けはしないだろうという結論です。といっても、さすがに無傷ではありません。多ければ多いほど、怪我の程度は酷くなります。

名のある武将が相手ならば、一対一ならば勝つ。しかし、二人以

上になると万全な状態でも勝てるかどうかはわかりません。運による要素（作者の気分）が強く出ます。

強化の魔術を使うと、三人までならば倒すことはできなくても負けることはない。

こんな感じにしようかなあと思っています。

織田信奈おだのぶな

新しいもの好きで、南蛮との貿易を推奨している。ツンデレである。

発想が斬新であり、今までの考えではダメだと思っている。しかし、その斬新過ぎる発想は民や多くの家臣には受け入れられず、「うつけ」「うつけ姫」と呼ばれている。

今川の決死隊に襲われたときに、士郎に助けられ、外見から腕の立つ南蛮人！と目新しさ故に仕官させた。

ちなみに十六歳。

容姿はぜひ小説を買ってみてくださいな。

柴田勝家しばたかついえ あだ名…六りく

織田の足輕は戦国最弱と言われる中で、未だに無事なのは彼女の強さが大きいだろう。しかし、知のほうはダメダメな体育会系の女の子。

本来は信勝の家老であるが、信奈の家老が過労で倒れたため（ギヤグではない）、代役として信奈に使えている。しかし、信奈のことは大好きである。

ちなみに十八歳。

容姿はぜひ小説を買ってみるY。

前田利家まえだとしいえ あだ名…犬千代いぬちよ

信奈の小姓。無口な少女だが、力は強く、槍の達人である。

ちなみに十二歳。

容姿はぜひ小説をr y。

蜂須賀五右衛門
はちすかごえもん

木下藤吉郎の相棒だった忍びの少女。藤吉郎が死亡した後、土郎と契約して部下となる。

川並衆と呼ばれる川賊の頭。三十文字以上の台詞をしやべると囁む。

容姿はr y。

斉藤道三
さいとうどうざん

元は商人だったが、天下を盗るために都合のよかった美濃を乗っ取った。

正徳寺で信奈と会見して、信奈になら自分の夢を託せると美濃を譲り、娘を義妹として尾張に送り、隠居を決めた。

エロジジイである。

容姿は……需要がないか。

登場人物紹介（五話時点）（後書き）

なぜ士郎がこの世界に来たのか、すっかり忘れていた私です。

第六話（前書き）

織田信奈の野望七巻発売ということで二話投稿しますっ！

第六話

道三のセクハラ発言のあと、信奈が殴ったり蹴ったりしていると、庭に侍っていた道三の従者が

「ぶ、無礼すぎる」

と刀の柄に何度か手にかけて以外は何事もなかった。それ自体も犬千代の静かな視線に威圧されて思いとどまったため、何事もなかった。：大事なことなので二回言った。

無事道三との会を終え、信奈一行は本拠地である尾張の本城、清洲城きよすじょうに帰ってきた。

信奈はさすがに疲れたのか、さっさと本丸のほうへと入ってしまった。

この世界に着たばかりの士郎はどうすればいいのか門前で途方にくれてしまった。

しかし、その悩みもそういえば五右衛門はどうしてるのか？と他人の心配に変わってしまうのは彼らしさだろうか。

すると、外套が引っ張られたので何事かと見てみると犬千代が立っていた。

「……こっち、こっち」

そのまま、三の丸のほうへと引っ張られた。

「そ、そんなに引っ張らないでくれっ」

「……ごめん」

「あ、いや、怒ってるわけじゃなくて……。あ、そういえば自己紹介してなかったな。俺は士郎、衛宮士郎だ」

「……前田利家。あだ名は犬千代」

「そうか、よろしくな前田」

「……犬千代でいい」

「そうか、俺も士郎でいいぞ。んで、どこに連れて行くんだ？」

「士郎を住み家に案内しろ、と姫さま仰せ」

「そうなのか？わざわざ悪いな」

「……別にいい」

士郎は犬千代の案内の下これから我が家となるところを目指すのだった。

「……到着した」

犬千代が指した先には、雑然とした長屋が広がっていた。

家と家の間には紅葉のような葉を這わせた生垣があちこちを覆い尽くし、これが垣根ですがなにか？状態だった。

「ここは、うこぎ長屋。下級武士が暮らしている」

「犬千代もここに？」

「そう」

「それで、俺の家はどこになるんだ？」

「……この建物が士郎の住まい。隣同士」

「そうか、知り合いが隣ってのはうれしいな」

士郎はこれから世話になる新たな我が家に入ってしまった。
狭いし、すきま風が入ってくるが、野宿することも多かった士郎

には、屋根があるところで寝られることだけでも十分だった。

「部屋の中は空っぽか……。まあ、元からあまり物を置かないし関係ないかな」

むしろ部屋に何か残っているということは以前はここに住んでいたということ。それが今は住んでいないということは亡くなったということだろう。おそらく戦で。そんなものの遺品が残っていると思うとぞっとするのは私だけだろうか？

「……そういえば、士郎」

部屋でくつろいでいると犬千代が入ってきた。

「どうした？」

「これ、姫さまが」

そういつて渡してきた袋の中にはすこしばかりのお金が入っていた。

「どうしたんだ、これ？」

「特別報酬だって」

「そうか……。なんか悪いな」

「……士郎、いつまでその格好？」

士郎は犬千代に指摘されて気づいた。

彼の格好は赤い外套に黒のプレートアーマーのままだったのだ。

「そういえば、すっかり忘れてた。せっかくだし、服でも買ってくるかな。」

「……案内する」

「でも悪いだろ？」

「……迷子になられたほうが迷惑」

「そうか。じゃあ、頼むよ」

士郎は犬千代に案内され、城下町を回っていた。

「そういえば、何も食べてなかったな……。案内のお札に何か食べさせてやるよ」

「……いいの？」

「ああ。それぐらいさせてくれ。っと、そういえば犬千代は普段何食べてるんだ？」

「……うこぎ」

「うこぎ？」

「……生垣に生えてるやつ」

「ああ、あれか。…ほかには？」

「……うこぎ、茹でたらおいしい」

「いや、だから…」

「うこぎの根っこを煎じると、薬になる。精が尽くし、町の商人に売ればお金になる」

「苦労してるんだな…」

「……月末のお給金ができれば、お魚やお米が買える」

「でも、それじゃあ栄養足りないだろう？勝家みたいに大きくなりたくないのか？」

「……胸なんて飾り」

犬千代に胸の話はタブーだったのか太ももを抓られた。

「いててっ！お、俺は胸じゃなくて、背の話を……。わ、悪かったから、手を離してくれ」

納得したのか犬千代は手を離してくれた。…まだ若干怒っているようだが。

その後、士郎はところどころやつれた着物を買い、あまったお金でわずかだが食材を買った。

家に戻り、犬千代に謝罪の意も込めて質素ではあるがご馳走した。

「……おいしい」

「そういつてくれると作ったかいがあったよ」

犬千代の食べる様子を見ながら士郎は

……犬千代って呼ばれるだけあって、犬っぽいなあ

とか考えていた。

ちなみに、犬千代の食べる様子は非常にかわいかったことを明記しておく。…暴食王^{セイバー}のライバル現るか？

食事を終え、これからどうするか考えているとまたしても（今度は着物の袖だが）犬千代に服を引っ張られた。

「……浅野さまのところへ挨拶に行く」

「その浅野ってだれだ？」

「うこぎ長屋の主みたいな爺さま。長屋の侍の中では一番偉い」

「まあ、ご近所付き合いは大切だよな」

主夫じみたことをやっていた経験からかこういうことの大切さをよく知っている土郎は、犬千代ともに外へ出た。

浅野家は、家のすぐ向かいに建っている館で割りと質素なものだった。

すぐに犬千代ともども屋敷に通されて、「浅野の爺さま」と対面できた。

……どこことなく視点が定まっていらないが、大丈夫だろうか？

「おうおう、信奈さま。すっかり大きくなられたのおー」

「……違う。犬千代」

「おうおう、犬千代じゃったかのおー。この前まではめんこい柴犬じゃったのに、すっかり人間に化けてしもうたのおー」

「……元から人間」

「ワシもぼちぼち老い先長くないでのおー。犬千代や、うちの孫娘のねねを嫁にしてはくれんかのおー」

「そこはかとなく最悪ですっ！この人、何回間違えたら気が済むんでしょうかっ！」

「おい、犬千代？なんかキャラ変わってないか？」

「……気のせい」

「おうおう、そちらの男はどなたかな？」

「どうも、信奈の下で足輕をすることになった、衛宮土郎です」

「おうおう、犬千代の旦那さまなのじゃなあー」

「……そう」

「そうですね、浅野さま。俺なんか旦那だなんて、犬千代に……。って、犬千代も夫婦の件肯定するなよ」

「……冗談」

……犬千代が奥さんなんて、元の世界のみんなが聞いたら、絶対通報されるだろ……。確かに、わくわくざぶーんに行ったメンバーの中でイリヤの水着に一番ドキドキしたけど、ロリコンじゃないんだからな。

必死に心の中で弁解している士郎くん（21）だった。

「おうおう、面白い若者じゃのう。ねねがもうすこし歳を取っておれば、嫁にやりたいところじゃがおー」

「……士郎は変態？」

「な、なんでさ？」

「……ねねは八歳」

「い、いや、嫁にするうんぬんは浅野のおじいさんが言ってるのであって、俺の意思では……。っていうか、そこに隠れている子がねねって子か？」

「おおっ、見つかってしまいましたか？ 信奈さまが気に入るだけのことはありますな！」

勢いよくふすまが開いて話題のねねが部屋に飛び込んできた。

ねねという少女はこの時代の栄養事情からか、現代の同年代の子と比べると小柄で、見た目は幼稚園児ぐらいに見えた。

だが、体が弱そうとかそんなことはなく、目には力があり、なかなか勝気そうで賢そうな子だった。

しろくんの身近にまたしてもようじよが……。先行きが不安である。

「この子がワシの孫娘のねねじゃ。なかなかのおりこうさんじゃぞ」

「ねねにごさる！士郎どの！どうぞよろしゅう！」

シロウの前に腰を下ろして、ねねは元氣にあいさつした。

「俺は衛宮士郎。よろしくな、ねねちゃん」

ねねはシロウの顔をじっと見つめていた。

「ね、ねねちゃん？」

さすがに無言で正面から見つめられて居心地がいいはずがなく、士郎は口を開いた。

「爺さま！ねねは決めましたぞ！ねねは士郎どののお嫁さんになるですぞ！」

「な、なんでさっ！」

「おうおう、貰い手が見つかってよかったのおー」

「……やっぱり変態？」

「ち、ちがっ！ね、ねねちゃん。そういつてもらえるのは嬉しいんだけど、俺の社会的地位というか、人としてのモラルというか、とにかくいろいろあって…」

慌てすぎて、モラルとか平気で使っているぞ、しろくん（21）
。…怪しい怪しいぞ。

「…ねね。士郎が困ってる」

「む、士郎どのを困らせるつもりはなかったのですぞ…」

「ねねちゃんかわいいから、もっと素敵な人が見つかるさ」

思わぬ助け舟により、なんとか不名誉なレッテルを貼られること

を回避した我らが士郎君だった。……ちっ。

「ねねは策士ですから…。じっくり時間をかけていくことにしますぞ…。まずは…」

安堵していたため、士郎には小さな策士の呟きは聞こえていなかった。

四人が大騒ぎしていると、門の外側から怒鳴り声が聞こえてきた。

「むっ…、少し騒ぎすぎたかな？ 帰るついでに謝ってくるよ」

「ねねも行きますぞ」

「騒いだのはねねも一緒ですから謝るのは当然ですぞ！」

「ねねちゃんは偉いな。大丈夫、危なくなったら守ってやるからな」

士郎はえらいえらいとねねの頭を頭を撫でた。

「……犬千代も謝るのに…」

犬千代がうらやましそうな表情をしていたが、それをよそにねねは士郎に気づかれないように、計画通り、とほくそ笑んでいたことを知る者は誰もいなかった。

士郎、犬千代、ねねが門の外まで出ると馬に乗った若侍の集団が浅野家を取り囲んでいた。

「我らは、織田勘十郎信勝さまの親衛隊よ！」

「信勝？ 信奈の弟か？」

「無礼者！この家にうつけ姫が気に入って連れてきた南蛮人がいると聞いた！うつけが気に入るなどたいそうなうつけに違いないと見物にきてやったのよ」

「信奈に気に入られた南蛮人って…。たぶん俺のことだけど、見物するほど面白いものではないぞ？」

「貴様！無礼であろう！若様、この者の態度、いかがいたしましたしょう」

白い馬に乗った、いかにも貴公子然とした少年侍が鼻で笑いながら馬を降り、士郎に近づいてまじまじ見つめてきた。：今日はよく顔を見つめられるな、少年。

とはいえ、外見は肌が白くて顔立ちが人形のように整っていて、格好によつては女の子にも見えなくもない男の娘おこのこだった。とわたしはわたしは分かりにくいフラグを強調して言ってみたり！

：ごほんっ。まあ、士郎のほうがはるかに背が高いため、見下ろされているのは信勝なのだが…。ぷぷぷっ。

信勝もそれが気に入らなかったのだろう、

「ぼ、ぼくを上から見下ろすな！ぼくは尾張の大名、織田家の長男だぞっ！」

とぼくはゴージャスなんだぞ！この庶民が！とでも言わんかのような口調で言ってきた。士郎の背の高さから来る威圧感で腰が引けているのはご愛嬌だろう。

「見下ろすなって、そっちが近づいてきたからこうなったんだろぅ…。馬に乗ればいいんじゃないのか？」

「そ、そうかっ！う、うつけの癖になかなか頭が回るじゃないか」

そういうと信勝はさっき降りたばかりの馬にもう一度乗り直し、

士郎に近づきいった。

「ご、ごほんっ！あのうつけの姉上がいよいよ南蛮人まで仕官させたというのでね。ぼくも直接この目で見てやろうと思ったのさ」

……なんか、慎二みたいだなあ

と士郎はのんきなことを考えていた。

「でも、さっきの会話を聞く限りやはりあの姉上が気に入るだけのことはある。ぼくに対してのその言葉遣いはなんだ？」

「礼儀正しき若殿とは大違い。あんなうつけ姫が尾張の国主とは片腹痛いです」

「まったくだ」

「…？ちよっとまってっ！」

自分のことに関しての悪口ならそこまで気にしない士郎ではあるが、自分の知り合い、しかもこの時代に来てどうするか困っていた時に強引ではあるが、道を示し、さらに家、職まで与えてくれた恩人にまで悪口を言われるのは我慢できなかった。

「さっきから聞いてれば、信奈の悪口じゃないか。今、信奈は関係ないだろうっ！言葉遣いが悪かったのは、俺だ！」

「貴様！うつけ姫に対してならともかく、若殿に向かってそのような無礼な態度。許せん！」

その声を合図に信勝の親衛隊の全員が士郎に対して刀を向けた。

第七話（前書き）

これ投稿したら、原作七巻読むんだ…（遠い目）

第七話

「…犬千代。ねねを連れて下がっていてくれ」

「…：謝ったほうがいい。信奈さまを侮辱したのは許せないけど、身分は向こうが上」

「それでもだ。大丈夫二人には迷惑かけないから」

犬千代は、士郎は自分が言っても止まらないと理解してねねを連れて後ろに下がった。

ねねは不安そうに犬千代と士郎を交互に見ていた。

「信勝、いや、信勝さまに聞きたいことがある」

「なんだい？最後の質問になるんだ、聞いてやろう」

「お前は信奈が織田家を継いだことを後悔してるのか？」

「そうさ。いくら父上の遺言だったとはいえ、あんな姉上に尾張を任せておけば、いずれ滅びる。皆が推薦するぼくが家督を継ぐべきだったとね」

「それはほかの家臣に言われたじゃないか。聞くけど、お前は尾張を、いや日本をどういう風にしたいんだ？」

「えっと、いや…。う、う、ういろを日本中に広めて全国区の食べ物にしてみたい、かな？」

「…はあ？」

「い、いや…。そ、そうだっ！尾張中からかわいい女の子をあつめて、あ、あと東の今川義元を討ち、北は斉藤道三を討ち、海道一帯を織田家の領地にしてみせる！」

「口で言うだけなら誰でもできるさ。出兵するためにかかる費用はどう算出するんだ？失った兵の補充は？戦続きで疲弊した兵達への配慮は？両方を同時にしてどう戦うつもりだ？」

「うっ…。そ、それは……。家臣たちがなんとか…」

「他人任せじゃないか！そんな考えじゃ絶対に無理だ！」

「で、できるとも……。ぼ、ぼくにはできる！ぼくには何しろ、尾張一の猛将、柴田勝家がついているんだからなっ」

「たった一人で戦に勝てるわけないだろっ！」

いやいや、ひとりで戦場駆け回って生き抜いてきたお前さんが何をいうか…

「う、うるさい！とにかく、ぼくの姉上は大うつけなんだっ！尾張中の民が笑いものにしてるんだっ！織田家の恥なんだっ！寺に通ってもじつとしていられなくて暴れてばかり、礼儀作法もぜんぜん身につけられなくて、母上から見捨てられてたんだぞっ！」

「母親が…」

「当然だろう？父上だけは『お前は天才だ。お前の思ったとおりにやりなさい』と甘やかしていたけどね。小さい頃から南蛮人と親しくして、天下がどうか、種子島がどうか訳の分からないことばかり言ってたんだ。その証拠に母上はぼくの居城に――」

「……もういい。もう十分だ」

「そうかい。じゃあ、ぼくに対する無礼をあの世で謝るんだね」

その言葉を合図に親衛隊たちは士郎に斬りかかった。

結果は圧倒的だった。

いくつもの戦場を越えて不敗を誇る士郎の前に親衛隊が束になってかかったところで敵うはずがなく、親衛隊の一人の腕を取りつて関節を決め、刀を奪うとあっという間に全員を気絶させてしまった。

「この程度とは…。使い手がこの程度ではこの刀がかわいそうだ」

士郎が手にした刀は名のある名刀ではなかったがなかなかの業物だった。

「…強い」

「さすがは、士郎どのですな！」

二人が関心している中、士郎は刀を一瞥した後信勝に視線を向ける。

「か、勝家ええええええ！助けてえええええ」

すると騒ぎを聞きつけてか、勝家がやってきた。

「士郎…、とんでもないことをしてくれたな」

「仮にも主を貶されたのだ。当然だろう。むしろ怪我をさせなかったことを感謝してほしいものだな」

「か、勝家っ！その無礼者を斬れ！」

「士郎…、すまないが、あたしは信勝さまの家老なんだ。覚悟してくれ」

「気にするな。私もそろそろ腕の立つ者の実力を知りたいと思っていたところだ。手加減は無用さ」

「…いくぞ！」

勝家は言葉と同時に士郎に斬りかかった。

士郎はそれを刀に負担をかけないよう受け流していく。

端から見れば、勝家が圧倒的有利で士郎は防御で精一杯というようにしか見えない。

しかし、士郎と対峙している勝家には士郎が手を抜いていることが分かっていた。

「貴様っ！手加減するなど言っておきながら手を抜くとはどういうつもりだっ！」

「いや、なに。あいにく丈夫さよりも切れ味を追求した刀を扱ったの斬り合いは初めてだったのね。それに、君のような美しい女性と見つめあうのも悪くないかと思ってね」

「――っ！あたしをバカにするなあ！」

恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にしてすごい勢いで斬りかかる勝家。

「そんなつもりはなかったのだが……。いや、止めよう。これ以上は君の誇りに傷をつけそうだ」

何度二人が刃を合わせたか分からなくなった頃、決着は着いた。勝家がついに痺れを切らし、大振りになったところに士郎のカウンターが入り、勝家の敗北が決定したのだ。

「か、勝家が負けた？うああああああ。ぼくが殺されるううう」

信勝は腰を抜かして、自分の生命の危機に絶望しており、犬千代は二人の演舞のような死合いに息をすることすら忘れていた。

「ま、負けた…、あたしが負けた」

勝家是一对一の勝負に負けたことに驚きを隠せずにいた。
そこに士郎が声をかけようと近寄ってくると、

「……負けたんだ。この命好きにしろっ。だが、信勝さまだけは助けてくれ」

と覚悟を決めたのか座り込んでしまった。

「信勝っ！」

「ひいっ！」

「そんなに怯えないでくれ…。今回は喧嘩両成敗ってことで手打ちにしないか？」

「な、情けのつもりか、士郎っ！」

「そんなじゃない。勝家は信奈、いや織田家にとって必要な存在だ。こんなところで死ぬなんてダメだ」

「し、しかし…」

まだ納得していない勝家に犬千代が声をかけた。

「……信奈さま、勝家のこと好き。死んだら悲しむ」

「そうだぞ。信奈は勝家のこと信賴してるんだから、死んだらダメだ。それに勝家の命は俺が好きにできるんだろ？なら、二人とも命を助ける。そのかわり今回俺の働いた無礼を許してくれ。それじゃダメか、信勝さま？」

蚊帳の外だった信勝は急に話を振られたことに驚いたが、

「ま、まあ、ぼくは寛大だからなっ。こ、今回のところはカンベ

ンしてやろう、いくぞ勝家！」

と、自分が助かるならいいやあとその提案を受け入れた。

「御意……」

二人が去った後、士郎は犬千代のほうを向き、

「ありがとな、犬千代。お前がいなきゃ勝家を説得できなかった」

「……勝家はおっぱいばいんばいんだけど、いい奴」

「いや、あんまりそれは関係ない気が……」

「いい奴」

「そ、そうだな……。それとごめんな、ねねちゃん。怖かっただろう？」

自分のよく知る人物が刃を向けられていたのだ、戦に出るはずのないねねには恐ろしい光景だっただろう。

「そ、そんなことはありませんぞっ。し、士郎どのが殺されるわけないと信じておりましたぞっ」

口ではそういうもののねねの目は潤み、声も体も震えていた。

士郎はねねを優しく抱きながら、深く反省するのだった。

騒動の次の日、信奈に呼ばれて本丸にある信奈の部屋を訪れた。
昨日の件がやっぱり表沙汰おもてぎたになったかなあと打ち首覚悟で部屋に
足を踏み入れた。

信奈は上座に座っており、手元には地球儀が置かれていた。

「来たわね。そこに座りなさい」

地球儀をくるくる回しながら、信奈は士郎を対面に座らせた。

地球儀を回していた信奈の様子は、士郎の目には言いたいことがあるのに言い出せない子供のように見えた。

そして、意を決したのか信奈は口を開いた。

「あんた、正徳寺の会見聞いてたじゃない？」

「ああ。斉藤道三とのやつだろ？」

「そう。それなんだけどね。：あんたはどう思った？」

「どうってどういう意味だ？」

「私が『世界』を見てるって話よ」

「ああ、いいんじゃないか？」

「いいって：。バカにしないの？」

「なんでバカにしなきゃいけないのさ。外国：、いや、南蛮の学問の進歩はすさまじいからな。島国のこの国は攻められにくい反面、どうしても外からの情報が入ってきにくい。そんな中で『世界』を見ることのできる信奈は関心されることはあっても、バカにされるはずないだろ」

「でも、民や家臣はバカにしてるわ。それに信勝だって：。事実、『せかい』を見てるだのと言っておいて、尾張一つ纏められなくて、弟の信勝に何度も謀反される始末だし：。」

「そういえば、何度の謀反を起こしてるのに毎回許してるらしいな」

「べ、別にあんなの脅威でも何でもないから放っておいてるだけ

よ！」

「脅威でも何でもなくても、尾張を纏めるために必要なことなら信奈はやるだろ？それをやらないってことは信奈は尾張と同じくらい弟のことを大事に思ってるってことさ」

「ち、違うわ！わたしは弟だろうが、謀反人は許さない主義よ！母上が悲しむから、斬りたくても斬れないだけ！」

「そんなにムキにならなくてもいいんじゃないか？」

「――！ムキになんてならないわ！決めた！勘十郎が、いえ信勝が今度謀反したら、殺すわ」

「な、なんでさ？肉親なんだろう？ひとりしかない弟じゃないか！」

「弟でもよ！私は、尾張の大名、織田上総介信奈よ。わたしは尾張の民、家臣に対しても責任を負わなきゃいけないんだから！」

士郎は後悔した。

このやりとりのせいで尾張をまとめるために弟を斬ると言わせてしまった。

それは自分と同じ、九を救うために大事な一を捨てるということ。
アーチャー
唯一の救いは彼女の目にまだ迷いが残っているということだろうか…。

これ以上言うとな本当にその迷いも振り切ってしまいかねないため、士郎は説得するのを止めた。

彼女はもし一を切り捨てようとするれば自分が命を懸けてその一を救って見せると決意して。

「そうか…。でも、人が死ぬのはやっぱりイヤだから、極力避けられるようにしないとな」

「…：あんた変わってるとは思ってたけど、やっぱり他の人間とは違うわね」

「そうか？」

「変わってるわ。わたしの話を聞いても驚かないし、戦国の世にも関わらず人が死ぬのはイヤ。おまけに南蛮の知識もあるなんて変すぎるわ。これなら、あんたが南蛮に行ったことがあるって言われなくても驚かないわね」

「あるぞ」

「うそっ！」

「驚いてるじゃないか……。でも今とは状況が違うから参考にはならないぞ」

「じゃあさ、この地球儀がどうしてこういう形をしているか知ってるの？」

「それは、俺達が住む地球がこれと同じ球体をしていて、すべての国は海で繋がってるんだ」

「じゃ、じゃあ、この地球儀で日本はどこにあるかわかる？」

そのときの士郎と話す信奈は本当に楽しそうな笑顔で、普段の大名としての顔ではなく、年相応の少女の顔だった。

士郎は日が暮れるまで彼女の話に耳を傾けていた。……余談だが、この日を境に呼び方が「衛宮」から「士郎」に変わった。

士郎が清洲城に来て一週間がたった。

その間に彼がしたことは、ねねと一緒に城下町を散歩に行ったり、犬千代にご飯を作ってあげたり、城下町で困った人を助けて回ったりしたことぐらいだろうか。

城下町では、最初士郎の白髪、赤銅色の肌に怯える人が多かったが、今では気軽に声をかけてくれるようになった。

士郎が平和を実感してながら過ごしていたある日の朝、犬千代と

共にご飯を食べていると、

「……この後、姫さまのところに行く」

と言われたので

「そうか、がんばってな」

と士郎は返し、犬千代がいなければ今日はまた城下に出るかなあとかのんきなことを考えていると、

「……訂正。姫さまが士郎を呼んでるから連れて行く」

意図が伝わっていないと分かった犬千代に訂正された。

「俺が、呼ばれてるのか？」

「……仕事を与えるらしい」

「そうか、じゃあ信奈に怒鳴られないようにさっさと行こうか」

「待って。まだご飯残ってる」

いつもなら返事数秒空きがあるはずなのに、高速で返事が来た……。確実に餌付けされている犬千代ちゃんなのだった。

士郎は食事を終えた犬千代に連れられて、本丸にある信奈の部屋へ入った。

信奈はいろいろなをかじりながら、地球儀をまたしてもぐるぐる回

していた。

「……連れてきた。衛宮士郎」

「デアルカ。犬千代、士郎、ちこう寄りなさい」

そう言われると、犬千代は膝を畳につけたまま、滑る様に信奈のすぐそばまで前進した。

士郎も見よう見まねで犬千代の隣まで前進した。

「まずは、犬千代。ご褒美あげるわ」

信奈はいろいろを犬千代に差し出すと、それに飛びつくように頬張った。

「……おいしい……もぐ、もぐ」

「かわいいわね。士郎は初めて見るでしょう、犬千代の食べる姿？」

「ん？ いや、そんなことないぞ」

「そうよね、初めてじゃないわよね……って初めてじゃないの！？」

「ああ、毎日見てるからな」

「しかも毎日！？」

「……士郎のご飯おいしい」

「しかも手作りっ！？」

信奈のにやけていた顔が不機嫌な顔に変わってしまった。

「ん？ 信奈、なんか機嫌悪いのか？」

「なんでもないわよっ！それより仕事の話っ！士郎、兵糧の調達してきなさい。要するに米！」

信奈が手を叩くと、小姓たちが小判の束を士郎の足元に差し出してきた。

「米を買ってくればいいのか？わかった」

「三千貫用意したわ！期限は二週間！最低でも八千石は買って来なさいっ！できなきゃクビ！」

「八千石！？無茶言うなよ、三千貫だと四千石、知り合いに負けてもらっても五千石が精一杯だぞ！」

この一週間の間にちゃっかり商人さんと仲良くなって、割引してもらえるようになっていいる士郎。

「ふん！この一週間働きもせずに犬千代と仲良くご飯食べてたんだから、そのくらい余裕でしょ！」

「それとなんの関係が「わ・か・っ・た・わ・ね？」：はい」
「ならさっさと行きなさいっ！」

なんで怒ってるんだ？と納得いかない顔をしながら、士郎は犬千代と共に信奈の部屋から退出した。

その後、信奈は部屋で一人、

「さすがに、八千石は言いすぎだったかしら？でも、犬千代と仲良くご飯食べてたって聞いたらしい言っちゃったし…。いまさら取り消すのもわたしの面目が…」

ついつい感情的になった自分を後悔するのであった。

第七話（後書き）

誤字脱字ありましたら、報告よろしく願います

第八話（前書き）

お待たせいたしました！…待ってないですか？そうですか…

第八話

長屋に戻ってきた士郎は信奈に言い渡された仕事をどう処理した
ものか考えていた。

「……どうするの？」

犬千代が正座しながら尋ねた。

「んー、そうだなあ。大量に買えばある程度は値引きしてくれる
んだけど、さすがに半額にはしてもらえないからな……。となると、
方法はひとつしか思いつかない」

「……？」

犬千代は検討もつかないというように首をかしげた。

「簡単さ、買うお金が足りないなら増やせばいいんだよ」

「……バクチ？」

「俺は運がないし、そんな一か八かの賭けに出るのはなしだ。五
右衛門、いるか？」

「……蜂須賀五右衛門、参上つかまつた」

音もなく五右衛門が現れた。

「……驚いた」

「前から思ってたけど、犬千代は感情を表に出さないほうなんだ
な。もったいないぞ、犬千代はかわいいんだからな」

「……そっちのほうが士郎は嬉しい？」

「ん？そりゃ笑顔のほうがいいに決まってるだろ？」

「……わかった」

なんか北の高校に送り込まれたアンドロイドインタ○フェイスみたいな口調だなあと考えたのは私だけではないはず。

「そういえば、紹介してなかったな。こいつは俺の仲間の蜂須賀五右衛門だ」

「……前田利家。あだ名は犬千代」

「拙者、忍びの蜂須賀五右衛門、士郎の配下でござる」

「ところで五右衛門？なんで庭にいるんだ？中に入れよ」

明記していなかったが、五右衛門が現れたところは士郎たちがいる部屋ではなく、庭だったのだ。

自分は部屋の中にいて、知り合いを外に放置というのは士郎の常識では考えられないのである。

「いや、拙者は庭にて結構でござる。そもそも忍びとは常に陰に……俺の気がすまないんだよ。お茶も出すから。それ以上しゃべるとまた噛むぞ」う、うるさい」

「……士郎は頑固。五右衛門が上がるまで話が先に進まない」

「士郎殿はそういうお方でしたな。では失礼するでござる」

「むっ……。なんだよ二人して」

士郎は自分の分を合わせた三人分のお茶を用意して、話を始めた。

「さっきも言ったけど、三千貫ではどんなにがんばっても八千石には届かない。そのためにまずは三千貫を六千貫に増やすことから始める」

「……忍びを使って盗む？」

「そんなことするわけないだろ？五右衛門にお願いしたいのはい

ろんな町の商品の値段がどれくらい違うか見てきて欲しいんだ。あとは簡単さ。安い町から商品を仕入れて高い町で売る。すると差額分がどんどん増えていくということさ」

「なるほど。拙者の率いる川並衆を用いて迅速に情報を仕入れ、さらに仕入れた商品の運搬をさちえることで、ろくちえんかんをあちゆめるのでごじやるな」

かんだ、と犬千代が呟くと、五右衛門はギロリと睨んだ。

「しかし、我ら忍びをそのようなことに使うとは士郎殿は変わった発想をされまちゆな」

また囁んだ、と犬千代が呟くとまたしても五右衛門はギロリと睨みつけた。

「さっそく周辺諸国の相場を調べて参る。三日ほどで戻るでござる」

五右衛門は九字を切り、煙幕を張った。

部屋の中で煙幕を張れば、中に居る人はたまったものではない。

犬千代と士郎は十分ほど咳と涙が止まらなかった。

士郎は二人に自分の案を語ったが、彼には不安があった。それは三千貫を二週間で稼ぐことができるほど、各町に物価の差があるのかということだった。

結果からいうとそれは杞憂だった。

五右衛門は、約束通り三日で清洲、井ノ口（美濃の城下）、伊勢の港町である大津、それぞれの物産品のそう座を細かく調べ上げていた。

五右衛門の報告によれば、各町に在庫の多いものや不足したものがいくつか見受けられたため、土郎、犬千代、五右衛門率いる川並衆が手分けをして在庫の多いものを買ひ漁り、少ないところへ売るを繰り返した。

さすがに、三千貫を稼ぐのには期限ギリギリまでかかってしまったが、なんとか目的となる六千貫まで集めることに成功した。

「なんとか間に合いそうだな…。犬千代、五右衛門、手分けして、米を買ってきてくれ。最後のひと踏ん張りだ」

「分かったでござる、土郎殿。本丸のほうに届けさせればよいのでござるな？」

「……急がないと大変」

「二人ともありがとな。ふたりの協力がなかったら絶対に無理だったよ」

お礼をする土郎を見て犬千代と五右衛門は顔を見合わせ、笑った。

「土郎殿。まだ終わってないでござるよ」

「……まだ信奈さまに届けてない。お礼はその後」

「…そうだったな。これが終わったら改めてお礼をさせてもらおうよ」

三人別れ、米を買いに城下町へ出た。

士郎、五右衛門は無事信奈の元へ米を納入できたが、期限の時刻ギリギリにも関わらず、犬千代がまだやってこない。

「犬千代遅いな…、俺ちよつと様子を見てくる」

士郎が心配になり、犬千代を探しに出ようとしたが、

「待つでござる。士郎殿はこの仕事の責任者。もし今から町に出ようとすれば、仕事失敗のばちゆからによがれりゆためにとうちようちようとちていりゆとられりゆでござりゆ」

「分かってる！でも犬千代が来ないのはおかしいっ！なにかあったんだ！」

「…士郎、さっきの言ってる内容がよくわかったわね……。犬千代が心配ならその乱波に探させればいいじゃない」

「…五右衛門。頼めるか？」

五右衛門が答えようとしたとき、

「……遅れた」

犬千代が入ってきた。

「よかった。無事だったんだな、犬千代。——っ！その服どうしたんだ！」

士郎は安堵した顔を驚愕に染めた。

犬千代は怪我した様子はなかったが、服には少量ではない血が付いていたのだ。

「……信勝さまの親衛隊に米の納入の邪魔をされた」
「なに？」

犬千代が遅れたのはこの前の騒動で士郎に敗れたことを根に持つ
信勝の親衛隊が米の運搬の妨害をしてきたからだった。

だが、それだけでは犬千代の服に付着した血の説明が付かない。

「……姫さま、犬千代を斬る」
「「「！！」」」

犬千代の発言に三人が硬直した。

「もしかして、お前……。その親衛隊を……」

犬千代はコクンと頷き、

「……斬った。そうしないと時間に間に合わなかった」

「バカやろう！間に合わなかったって俺がクビになるだけだったんだぞ！」

「……信奈さま、士郎と出会ってから昔みたいに楽しそうに笑う。
いなくなると困る」

「それはお前だって一緒だろ！お前がいなくなったら、信奈だつて、ねねだつて、勝家だつて困るし、悲しむ！俺だつてそうだ！」

「……でもこのままじゃ、信勝さまと揉める」

信奈は迷っていた。妹以上の存在である犬千代と弟である信勝、
どちらかを斬らねばならない。

欄干にもたれて震え始めた。

このままではまずい、と士郎は何か手はないか策を練る。

そして、思うがままに叫んだ。

「死ぬなっ！とにかく尾張から離れろ！」

「……でも……」

「ほとぼりが冷めるまで姿を隠せ！信奈に斬られそうになって逐電したことにして、信勝側と手打ちにする！俺がかならず信勝と和解させるから、そのときに戻って来い！」

「……士郎……」

「頼む！お前がいなくなったら、寂しくなる人間が大勢いる！俺はそんな顔を見たくないんだ！」

「……わかった」

「信奈もそれでいいな」

「犬千代……」

「……姫さま。お別れ」

信奈は唇を思いっきりかみ締めており、一筋の血が流れていた。

「……かならず戻る」

犬千代は安心させるように優しい笑みを浮かべて言った。

「……士郎。お礼、帰ったら貰うから」

「ああ、信勝とは必ず和解させるからな。遅れた分利子つけてお礼するからな！」

犬千代はかならず生きて戻ると心に誓い、清洲を去って行った。

結果から言えば士郎の案は失敗だった。

犬千代が逐電した次の日、信勝の親衛隊が犬千代に斬られたことを信勝の家臣が騒ぎ出したのだ。

信勝は正直、あの士郎と対面するのは勘弁したかったが、家臣達に担ぎあげられてつい乗り気になってしまったのだ。

「ねえ勝家。犬千代を引き渡せ、と姉上に交渉を持ちかけてくれないかい？ 姉上が突っぱねるようなら今度こそ戦だな！」

「御意…」

頭の痛くなるような命令を受けた勝家は清洲城の本丸に向かっていった。

勝家は常々信奈と信勝の不和を取り除きたいと考えていたが、竹を割ったような豪放磊落な性格であるため、若くして尾張の猛将と呼ばれるほどの武将となったが、頭を使うことは苦手だった。

勝家が信奈と信勝を和解させるために思いついた案といえば、信勝と彼の取り巻きを怒鳴りつけて改心させるという親父が悪いことをした子をしつけるような案だった。

ついでに言えば、勝家は信勝付きの家老でありながら、昔から信奈のファンであった。

父、信秀が健在だった頃の信奈の笑顔は勝家がため息を吐くほどの愛らしさがあったが、今は心を閉ざしてムスツとしている。…最近は自分と対等に話のできる道三と士郎によって若干笑顔を取り戻していたようだが。

それに加え、勝家は裏表のない性格で、忠義一筋である。

いくら信勝の家老だといっても、尾張の主である信奈に謀反を起こすことなど考えられない。

実際彼女は信勝が謀反を起こした際、ほとんど戦うことなく、逃げ帰っている。

そんな勝家の性格、思い、取り巻く状況が彼女を深く悩ませるのだった。

しかし、どんなに考えても彼女に出てくる案は

信勝さまを取り巻く家臣を全員斬っちゃえば信勝さまも目を覚ますのではないか？

というナチスもびっくりな男らしいものだった。

しかし、そんなことをすれば、小心者の信勝が何をしでかすか分からないし、織田の手勢を失うのは正直いただけないので思いとどまった。

悩みまくっている間に信奈の部屋についてしまった。

そこにはお茶を入れている士郎とそれを満足そうに楽しむ信奈がいた。

士郎はお茶を入れるのに慣れているかのような手つきで茶を点ていた。

信奈は手羽先をくちやくちや食べながら、その様子を見ていた。だが、その様子はいつもと比べ元気がないように勝家は見えた。

「おっ？勝家か。ちょうどよかった。今、お茶を点てたところなんだ一緒にどうだ？」

「へっ？！いい、いや、あたしは…」

「六、飲んでみなさい。士郎のは絶品よ」

信奈にそう言われては断ることもできず、お茶を受け取る勝家。お茶碗を受け取ったが、礼儀作法はどうなんだ？と固まっていると、

「別に特別な席じゃないし、俺が点てたお茶だから好きなように飲んでくれ。おいしく飲んでもらえたほうが俺はうれしいな」

と言われ、とりあえず口に運ぶことにした。

「…おいしい」

「でしょ？」

「はい、姫さま。……ってそうではなくて！その……、今日はお話があつて参りました」

「…なんの用よ？」

信奈も話の内容は分かっているのだろう、不機嫌そうに尋ねた。

「え、ええつと…、その……、い、犬千代の件で参りました…」

「……犬千代なら出奔してしまつたわ。居場所はわたしにもわからないのよ」

犬千代の名前が出たとたん、信奈の目が少し潤んだように見えた。犬千代は幼い頃からずっと信奈に犬のように付き従い、信奈にとつては心を許せる妹同然の存在だった。

そのことを知る勝家は信奈の心情を思い、さらに頭を悩ませる。

「の、信勝さまは犬千代を引き渡せと……さもなくば、再び謀反差し上げると…」

「あいつはお調子者のバカだから、取り巻きに乘せられてそんなこと言ってるんでしょ？六、なんとか信勝を説得できないわけ？」

「も、申し訳ございません！この勝家、戦場では誰にも遅れを取らぬと自負しておりますが、その…、こういう話は疎く、脅すか、斬って黙らせるしか方法が思いつかず…」

「はあ…。六らしいわね。いい、六。駿河の今川義元が上洛の準備を進めているわ。これ以上尾張の中で揉めている余裕はないの」

「うう、尾張の存亡の危機ですね…」

「だから、これ以上この事態に迷惑をかける弟なんていらないわ。次は母上が助命しても斬るわ！」

「し、しかし、信勝さまは血を分けたたった一人の弟君」

「それがどうしたの？ いい？ わたしは尾張の民と家臣の命を背負っているの。そんなこと関係ないわ！ それに今回の件だって、信勝の親衛隊がちょっかい仕掛けたのが原因でしょ！」

「お、仰るとおりです、姫さま…」

「わたしの与えた仕事の邪魔をした、これは信勝の謀反よ。六、あなたに命令するわ。今すぐ、信勝を連れて、ここに来なさい！」

第八話（後書き）

m h p 3 に再びハマってしまった私です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4209x/>

正義の味方と戦姫達

2011年12月7日00時45分発行